

〔享保集成絲綸錄 三十四〕承應二巳年閏六月

一守隨善四郎二人之秤目、無相違被仰付候上ハ、六十六ヶ國に而用之遣可申事、

一東三十三ヶ國は守隨秤、西三拾三ヶ國は善四郎秤、直段無高下賣可申事、

附守隨秤、西三拾三ヶ國ニ而賣セ申間敷候、

善四郎秤、東三拾三ヶ國ニ而賣セ申間敷候、

若相違之輩有之候而、賣候者於有之は、相定之通、守隨善四郎互可改之事、

此趣今度被仰付候間、自今以後當御地之儀は不及申、東三拾三ヶ國之者共、此旨可相守、今迄持來候諸人秤守隨改秤目不同之惡敷分ハ取上候、秤目能分ハ守隨ニ印を爲致其儘遣可申候、印貫ハ秤一挺ニ付一分ヅ、守隨ニとらせ候、是又左様ニ可相心得、善四郎秤遣度ものは、守隨ニ印を爲致可遣もの也、

閏六月

明曆元未年八月

一以前茂度々相觸候得共、町中ニ古秤隱置申由被聞召上、彌此度被仰付候間、此旨堅可相守候事、

一ちぎわた秤、皿秤れいてんぐ、其外萬之古秤、于今於有之は、其町々ニ而吟味致當月中ニ守隨方

江月行事持參仕、改させ遣可申候、勿論守隨秤之外つかひ申間敷事、

一旅人古秤之儀も右同前

右之通、町中家持之儀は不及申、借家棚かり下々迄念を入爲申聞、向後萬之古秤隱置申間敷候若相背候者、急度曲事可申付事、

八月

萬治二亥年六月